

エベレスト 見に行くモン!

並木 美卯



寄稿：魔法の鏡を手に入れたとき
ソバナ・バジュラチャリア

15期 舟田 節子

ちょっとした騒動から、本を出すことになりました。「自分の力を問うてみよう」と思った時に、手元にあった長編がヒマラヤ紀行でした。どんな感想がついて返送されてきたのか…と、開けてみたら、「刊行お勧め」の判定だったのです。

出版社の小遣い稼ぎと思ったものの、文章修業も実地に限ると、毎度の「前向き」で決断してしまいました。結局のところは、28日間のトレッキング本文だけでは経緯がわからず、また「毒抜き」も必要で、ほとんどが書き直しとなりました。

内容は、トレッキング入門をかねつつの人間模様。お金で辺境の旅を買い、サービスされてあたりまえ、文句をいってあたりまえ、それでいて淋しい日本人の姿です。それにネパールとの文化比較、国際交流、男女共同参画、教育問題などをからませています。

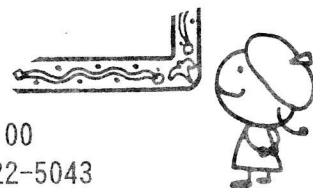
日本人からのネパールのみでは不公平と、ネパールの友人ソバナさんに、ネパールから見た日本も書いてもらい、寄稿紹介しました。

瓢箪から駒のような経緯であったものの、今自分の書きたいこと、書けることの全ては書いたように思います。リプロ系列店で、手に取られて下さい。

(並木 美卯…卯辰山の麓並木町に住む、卯年、卯月生まれで3つの卯くらいの意味。

ペンネームでは、宮部みゆきの語感が好きでした。それだけなのに、けっこう作家モードになれたのが、自分でも笑えました。)

◆ネパール大好き仲間展◆



日時：平成19年 3月13日(火)～18日(日) 10:00～18:00

場所：浅の川画廊 金沢市並木町2-10 ☎076-222-5043

主催：石川ネパール協会

後援予定(11月28日に役員会を通ったばかりで、これからが正式依頼ながら)

金沢市教育委員会、北国新聞社、テレビ金沢、エフエム石川、ラジオかなざわ
アルパインツアー社、学研、ネパール大使館など

今年度改訂使用となった東京書籍版英語教科書中3用で、大々的にネパールが扱われています。そこで協会も「ネパールを知ろう 知らせよう」の展示を行うことにしました。最貧国として援助してあげたい国であると同時に、心洗われる国を表現していきます。協会の援助活動を紹介し、パネル、写真、絵、イラストを並べます。舟田が責任者につき、以下の金大ワングルOBの方々にもご協力をお願いしました。

11期 長岡 正利様 地図展示、立体視図 (本邦初公開図もあり)

15期 上馬 敏栄様 油絵

20期 中村 元風様 今九谷

21期 竹中 敏様 イラスト(ユキヒョウ、アネハツルなどの動植物)

29期 深井 嘉浩様 トレッキング説明会(恒例の春の説明会の会場を変更して)

16日(金)夕方、夜 17日(土)午前、昼の4回。素晴らしい映像です。

会場は、浅の川縁。昔、北国会館という映画館のあった場所に建つマンション：浅の川ハイムの1階です。どうぞお越し下さい。

最新情報は、ワングルHPのほうで、ご確認下さい。

山小屋酒場報告

飯場のおばさん 舟田 節子

◆春の段 5月20日(土)～21日(日)

参加者：小川修司 篠島益夫 篠島節子
加藤忠好 加藤智美 長岡正利 大島良治
吉田穂積 奥名正啓 舟田節子 北川隆次



長い冬でした。例年より雪解けが3週間は遅いような…金沢から見える高三郎はまだまだ白く、また方々で、林道が不通になっていました。

犀川ダム管理事務所へ恒例の確認電話をいれてみると、(例年なら4月28日から、ダムまでの道は供用開始です)

「重機でやっと除雪した所や。ダムから奥は私もまだ入っとらん。上から崩れて倒木が道をふさいどる所がいっぱいあるぞいね。それこそ雪が湖面にまでなだれ落ちとるぞ。20日頃やったらとけとるかもしれんけど、木の始末やら、道の整備はいつになったらやれるかわからんわいね」

との、迷惑そうな返事でした。

これはもうポートをお願いするしかなさそうです。

頼みの綱の山下さんは、昨冬狩猟中に脳梗塞で倒れておいでました(OB会計から、お見舞いを出しています)。どれだけ回復されたものか…と、気になっていましたが、4月22日高尾山の帰りに出くわしたのです。もう狩猟に参加しておいでました。話しぶりにもマヒの跡はなく、何より倉谷のために喜んでしまった私でし

た。いつもなら、連休明けには引き上げてしまう猟友会の大型ポートも、雪解けが遅いため、まだまだ係留される見込みとのことでした。

今回は、近畿OB会の遠征隊も参加です。湖面までなだれているとなると、安全が最優先。帰りのポートもお約束して、山小屋酒場を実施しました。

さて20日は、朝から雨です。でも、ポートを頼んであるからには、実行あるのみです。来るたびに、旧工学部キャンパスは殺風景になっていきます。それでも、付属高校が改築中の間の仮校舎と決まって、まだ封鎖されず、集合場所として使えます。メンバー紹介をしてから、乗り合わせ、ダムに向かいました。



ダムからは2本の水流が落ちていました。見おろす湖面は間近にあって、たいへんな水量です。ポートから見るダムサイトにはさすがに雪はなくなっていました。上部斜面から崩れて倒木が逆さまにかぶさっている所が何箇所も見えました。昨秋には、道をふさいでいた落石が久々に取り除かれて、喜んだばかりなのです。

山下さんからは「水がかぶっとる所がある。歩けんことはないがやけど…。迂回する所も作ってはあるけど…」「わしのテントも、昨日までは水に浸かっとった」との、胸騒ぎを覚える予告がありました。

なるほど倉谷の舟着き場は浸水していました。川は盛り上がるように流れています。二人の日帰り者用に帰りの時刻を告げましたが、山下さんも鎌をもって上陸です。懸念していた道下がえぐられていた箇所は、抜け落ちていました。



靴幅分だけの足場が崖側に刻んであり、真新しい虎縄が手がかり用に張ってありました。先行した山下さんは鍬で、さらに刻みこんでくれました。この虎縄も、彼が掛けてくれたものなのです。ボートの便だけでなく、ちょっとした心遣いをして下さる山下さんの出入りがなくなったら、ワンゲルも倉谷には通えなくなることでしょう。

水量計の箇所がまず冠水。そこを渡って次のカーブした淵が…幅いっぱい川になっていました。護岸堤防の30cm幅の石積みの上をいつもなら歩いていくのですが、そこも30cm深さに水をかぶり、それとわかるかすかな波が立っています。スパイク長靴の山下さんは、

「ここ歩きゃ渡れるわいね」

と、何気なく進まれて、15m先から「ここや」とばかり指さされます。しかし、押してくるような水流、踏み外せば左は深い淵です。奥様方も、40年ぶりの方もいて、ボートだからと、両手に荷物は一杯なのです。ヤバイ！

諦めて戻り、先程聞いた、山越えの迂回路を通ることにしました。こんな時には使われていた道なのでしょう。それらしい踏み跡はあります。しかし、山人の迂回路なるものは、獣道レベルです。ようやく尾根によじ登ると、むこうから回り込んできた山下さんが、「次はこっち」と指差し、「細引を張っておいたさかい」なんて親切な人！と感激したものの、その下りもまあ、緩いといえるか…です。左に荷物をぶら下げ、右に細引。すでに靴底も、掌も泥泥…アッの次には止める術もなく、あえなく落下。



「荷物はみんな落として下さあい」

で、コロコロ、ゴロンゴロンの物雪崩のあげくに、さっきから15m先の地点にようやく下り着きました。泥まみれの人と、綺麗な人に分かれてしまったのが、技術差と体重差か…。すでに1時間はたっていて、長靴でさっきの淵を渡ってしまっていた大島さんが

「小屋でいつまで待ってとっても来んし、戻ってきたんやけど」

と、呆れ顔でこの難儀下山を見上げていました。

「高三郎より疲れたかもしれん」

とボヤきながら開けた小屋は意外に綺麗でした。春一番は、床一面、カメムシの死骸と、ヘビの白い糞で覆われているものなのです。ブルーシートの覆いを張ってその下に荷を置き、小屋掃除にかかる者、水場補修に向かう者、トイレ補修に励む者…。

ここは昔お寺のあった場所なのだそうですが、こんな山雪の年にも被害を受けず…はさすがの立地と思わされます。しかし、小屋の屋根の流



れを利用したトイレのほうは、屋根雪のたまりをまともに受けたらしく、バタバタになっていました。春と秋の2回しか来れないものの、こうやって手を掛けられてこそ、小屋は維持されています。先程の冠水といい、倉谷に来ると、圧倒的な自然の中で、いかにヒトは知恵を絞り勤勉に生きてきたかを思いしります。もっとも今の私達はたまにのことだから、笑ってやれてリフレッシュになるのです。

仕事は大勢での通り、小屋内はきれいになり、水も流れ出て、トイレもまっすぐに建ち直りました。雪の落ちなくなった合羽を室内に取り込み、宴の準備です。山菜の天麩羅は長岡さんの定番といったところです。昨年私は28日間のトレッキングに出て、それですら、主人は同情されたり、大物(?)かと思われたりしました。しかし、長岡夫人の場合はこの4月から北京へ語学留学にお出掛けです。その留守にお弁当を作って出社する彼の場合は、大物どころか別格、夫の鑑と言うべきでしょう。

山菜シーズンとあって、私も、何が採れてもいいように、調味料類をあれこれと持ち込んでいました。そういえばベルクハイム下には、いつもの板金屋さんがいて、立派なゼンマイを分けてもらえました。

「田村さんは来んがかいね」

というので、

「実は金沢には来ているんですけど、工学部の同窓会に出て、それからワングルの同期会のほうへ合流らしいです」

と答えました。そうでなくても教祖様はこのと

ころ寮歌祭の「若手」としてお忙しいらしいのです。

ご飯の歌も、大中小もこなし、外へ出れば、満天の星でした。

翌21日(日)は、新道取り付きまで、山菜採りがてらのお散歩です。川水は格段に引いていました。しかし雪の斜面が方々で、山道をさえぎっています。コゴミ、ウドが採り放題です。近畿OB会では山菜の名手と鳴らす小川さんが「北陸の山菜はやっぱり違う」と感激しておいでました。

ウドを両脇に抱えて小屋へ戻ると、穂積親父達が、軒下補修に励んでおいでました。来春にはまた、木材の搬入がいりそうです。

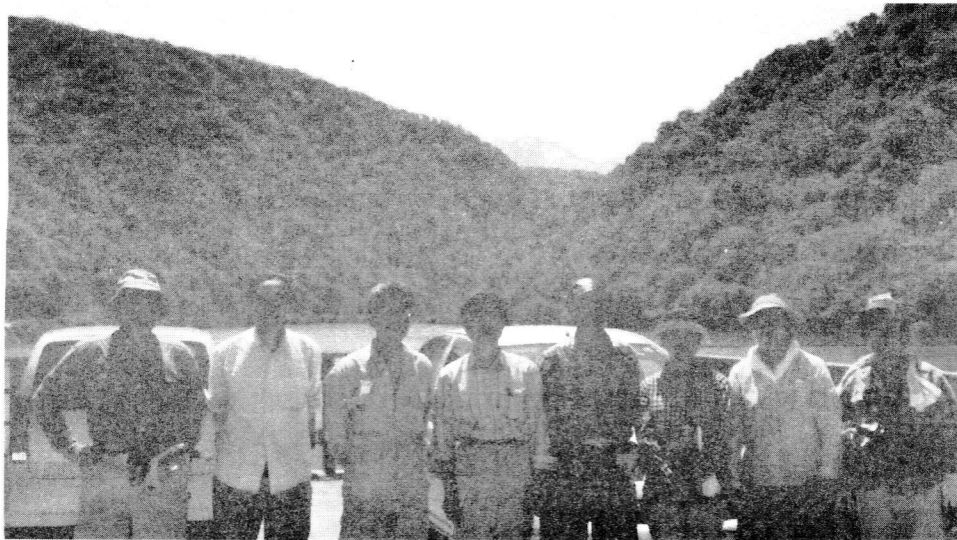
帰りにもボートを頼んであったので、小屋に貯まっていたビン類、モーターや投光器などの不明物も下ろすことにしました。山菜も押し込むと、来る時より重くなりました。

来る時迂回したあの淵は、平常通りの水流になっていました。山下さんによれば、昨日も1時間後くらいには水は引いていたそうです。帰りのダムからは、すっきりと高三郎が見えていました。

ダムで解散したのち、小川さん、篠島夫婦、長岡さん、私は、吉次山に足を延ばしました。頂上を過ぎてすぐの刈り開けからは、根張りの大きい高三郎山が、残雪も豊かに眺められました。

◆秋の段 10月19日(木)

参加者：辰野隆義 吉田穂積



(秋はみなさんの予定が合わず、内容も搬入資材の採寸だけだから、日帰りだよとのことでした。辰野さんとの都合もまだ合わず、HPには載せないほうがかえって気楽という理由で、お知らせも出していません。以下、穂積さんメールより)

犀川ダムからは辰野にはピッケルを持ってもらい、吉田は胸にクマ撃退スプレーをつけ、手に持つ缶を打ち鳴らしながら行きました。二つ

目の切れ込みまでに、二、三組の釣り人を見かけただけです。

取水口は20mほど土石流で流れされ、ホースは土から出ていて、その先端にあるはずの網籠は諦めて切断し、谷横の平らな場所にホースを引き上げてきました。

来春の小屋作業の搬入資材をピックアップして帰ってきました。



2007年 春の山小屋酒場 予告

5月12日(土)～13日(土) or 19日(土)～20日(日)

補修木材搬入のため、ボートを利用します。

ワングルOBならではの湖上遊覧が楽しめるチャンスです。

山菜豊富! 満天の星! 今も啼くトラツグミ!

金沢の秘境倉谷に建つ、ワングルOBならではのセカンドハウスです。

水洗トイレ完備 金沢市の水源極上ミネラルウォーター飲み放題

囲炉裏あり。労働ややあり。高三郎にも登れます。(シャクナゲ 残雪)



4月以降、ワングルHPにて公示します。もしくは

吉田おやし ☎076-241-4375 舟田おばはん ☎076-222-9288まで

お問い合わせ下さい。

内容は、以下の標題のとおりですが、世に広く言われているような「氷河の後退」に対して、

- ① カラコルムでは、ここ1世紀の間、氷河は後退していない。——ただし、衰退はしている：厚さ減少（地球温暖化は別として、「極地や山岳地帯の氷河が大きく後退しつつある」と言われている中で。）

- ② これまで、探検時代の古い地図を利用して、このようなことを検証した例はない。——というものです。

40枚以上のPPTに、新旧の地図や写真を盛り込んだ。発表そのものもあり、ご興味の方がいましたら、お送りいたします。

カラコラム山脈での最近の1世紀における氷河の変動

— 衛星画像と探検時代の地図の比較による／カラコラムの巨大氷河は後退していない

長岡正利(国土地理院客員研究員／いであ(株)勤務)

1. はじめに

世界の著名な山岳地帯の氷河については、19世紀に小氷期が終わって以降、後退・縮小傾向にあることが観察されてきた。また、近年の地球温暖化傾向の中で、それがさらに加速されていると見られている。

近年の地球温暖化に関連して、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)の『第3次評価報告書』(2001)は、現在の気温上昇トレンドから見て、今後100年間で地球の平均気温が1.4～5.8℃上昇するとした。これは、氷河を始めとする微妙な自然系に大きな影響を及ぼす。

また、WWF(世界自然保護基金)は、その報告書『An Overview of Glaciers, Glacier Retreat, and Subsequent Impacts in Nepal, India and China』(2005)において、各地での研究を総括して、温暖化の進行に伴ってヒマラヤ(ネパール・インド・チベット)の山岳氷河の後退が加速していることなどを示した。また、氷河の後退による下流氷河湖の決壊・洪水の危険性も指摘されている。

2. この分野での研究の経緯

ネパールやブータンヒマラヤについては、我が国の研究者により、ここ30年間ほどの、実測を含む現地調査の実績があつて、『雪氷』特集号(2001)などにその成果がまとめられており、中尾正義(2001;同号中)は、「ヒマラヤでは、最近20年あまりの間に世界でもトップクラスの勢いで氷河が急速に衰退してきている」と述べている。また、関係研究者の共通認識としては、「表面にデブリ(岩屑)を持たない規模の小さな(白い)氷河は急激に衰退しているが、デブリに覆われた(黒い)大型氷河は断熱効果で衰退が抑制されている」と考えられている。

なお、中緯度地帯での巨大氷河が集中しているカラコラム山脈については、厳しい自然条件もあつてか、同様の長期的調査の事例に乏しい上に、さらに遡る数10年以上前との比較については、氷河の変動を具体的に述べる文献はないようだ。

3. カラコラム山脈での最近1世紀の氷河の消長

ところで、カラコラム周辺は19世紀から大英帝国とロシアの角逐の場であり、地上に残された最後の地理的探検の対象地でもあつたことから、西欧の多くの探検家や登山隊が調査にあたり、良い地図を残してきた。

演者は、カラコラムの山歩きに興味を持つとともに、長期に亘ってその地図を蒐集してきたが、たまたま、氷河消長との関連で古い地図を見たところ、カラコラムの

巨大氷河のうち、数10年以上前の詳しい地図が利用できる何れの氷河についても、衛星画像(Google Earth)との比較により、最近のほぼ約1世紀の間では、その氷河舌端位置には変化がないという事実気づいた。

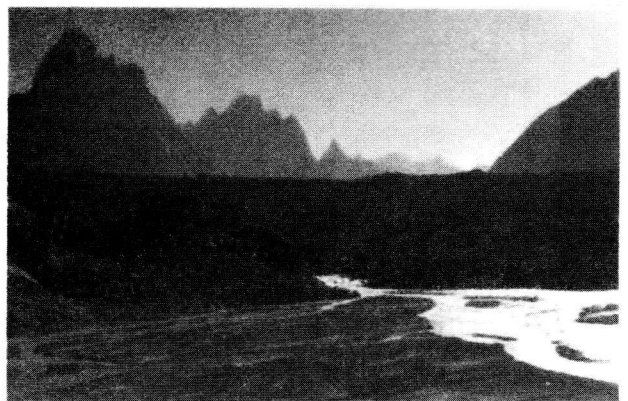
予稿集での紹介は、K2から流下するバルトロ氷河である。大会では更に豊富な事例を紹介し、カラコラムの巨大氷河は後退していないことを説明する。

4. あとがき

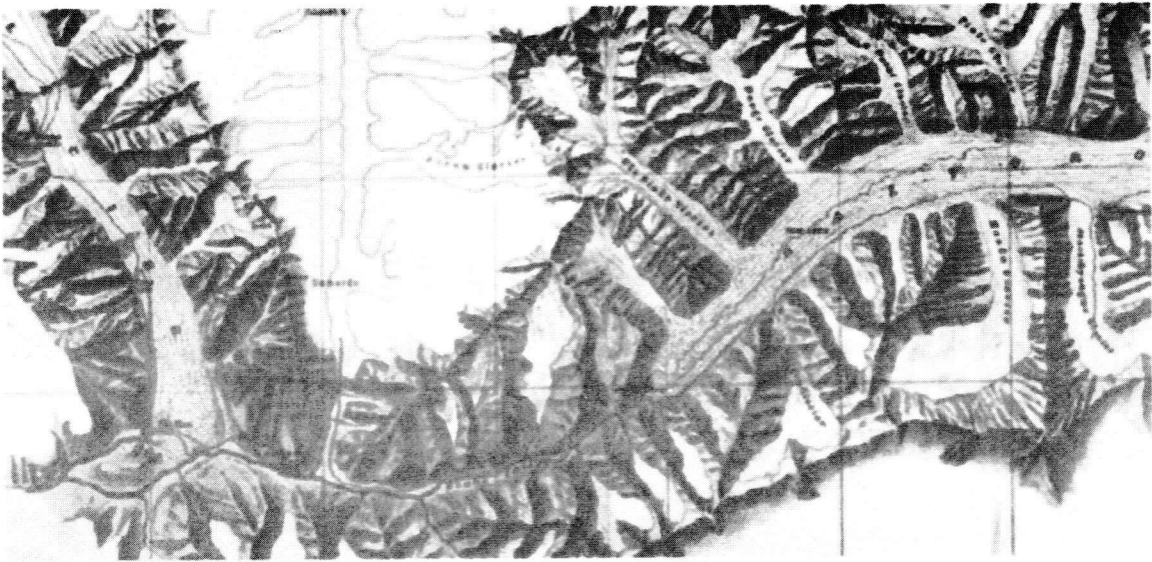
なお、演者は、雪氷学や気候学に係わる者ではなく、地理学的な観点から地図・衛星画像などでの比較によって、ここ1世紀の氷河の消長を述べたものである。対象とした氷河の涵養(降雪)と消耗のメカニズムや、この地域についての気候変動については言及できない。



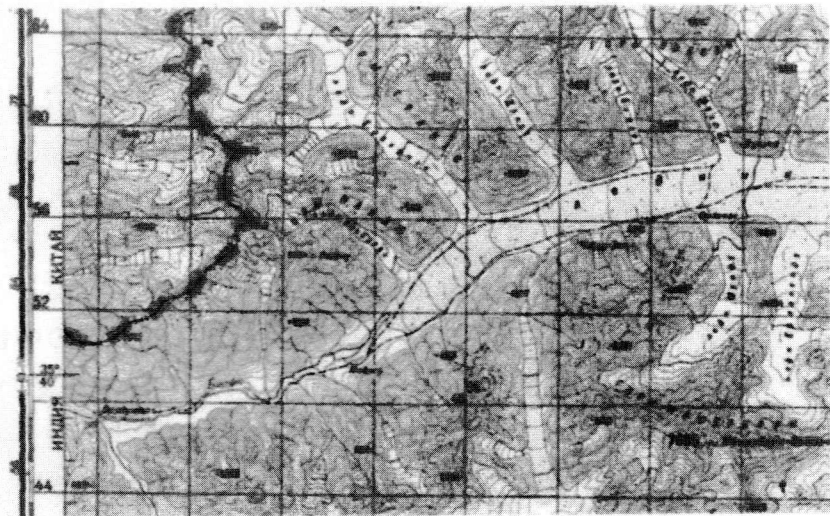
アブルツィ公のカラコラム探検(1909)時の、バルトロ氷河舌端とその奥の針峰群。F.de Pilippi撮影。



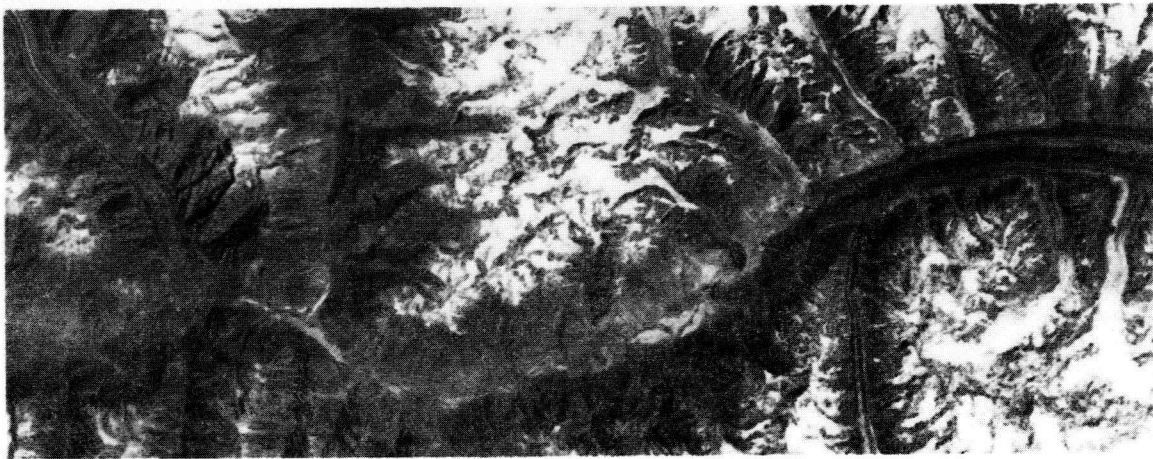
上と同位置から長岡撮影(1999):中央部での比較を。氷河が薄くなり、遠くの山(上写真↓印)が下方まで見える。(ここ1世紀で、氷河の後退はないが、衰退している。)



114年前：コンウェイ(1892)によるピアフォ・バルトロ氷河探検の地図。右がバルトロ氷河下部。左はピアフォ氷河。



30年前：ソ連邦参謀本部10万分1図(1976)の編集による20万分1図：UTM距離方眼は4 km



最近：最近の衛星画像（Google Earth より）：バルトロ氷河の舌端位置は、1892年の地図と同じ位置。

金 沢 望 郷 歌

9 期 山中重夫

先般BS TVでアンサンブル金沢による「金沢望郷歌」が演奏され、歌われていた。

犀星以来金沢は望郷が似合う街なのか……。

次が、私の望郷歌である。

1. 金沢城址より卯辰山へのマラソンが我がクラブの日課。

卯辰山に登ると徳田秋声の歌碑あり、

「生延びてまた夏草の目にしみる。」

我詩人と走りし、望郷の街 金沢

2. 冬、兼六園より北の方角を眺めればどんよりとした日本海。

南に目を転じると戸室山が白い雪の中に

何本かの黒い筋を引いてどんより佇んでいる。

いやがうえにもそこが北陸であり、

春の陽までの辛抱を教えてくれた望郷の街 金沢

3. ベルクハイムより駒帰のダムサイトまで歩くこと二時間。

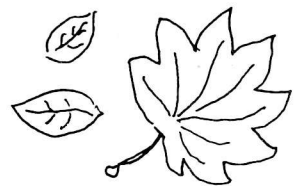
湖畔を幾重に曲がれば着くのか。

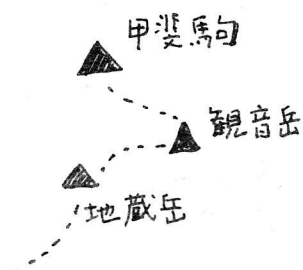
駒帰に着くとバスが発発してしまった後。

1時間後のバスを待つは、楽しき。

時間に追われない楽しさを学ぶ。

ただただ歩くことの楽しさを教えてくれた望郷の街 金沢





秋の甲斐駒・鳳凰三山

6期 合津 尚

昨今の高齢者登山ブームに便乗して、我も何処かの山にと思案していたら、10月初旬の二つ玉低気圧で北アや海での遭難騒ぎ。早々と吹雪の知らせに眼を転じて南アの未登だった甲斐駒からついでにと欲張って、2泊3日で鳳凰三山まで足を伸ばす計画になった。

低気圧通過後で天気の安定するタイミングをネットの72時間予想天気図を伺いながら、休みはマイペースで取れる身で10月26日の早朝に新宿を出発。

選んだルートは時間があり金のない老人には少しハードかなと思ったが、最遠の黒戸尾根でこれは昔から修験者の道。縦走の荷物が負担になって鎖・梯子の連続する登りは予想通り。初日は7時間の行動で営業期間終了の山小屋に一人泊だが、小屋はきれいであった。

翌日は小雪の舞う早朝から本格的な岩場の登りとなった。8合目過ぎの南に面した岩場で程よいテラスに昭和42年藤原君ここに眠るの銅版、全共闘世代か・・・生きていると定年かな。さてそれからの登りは全くの岩登りで、腕力勝負となった。幸い雪は少なかったが降ってくる雪で岩場が滑りやすく、少々だが滑落したりでいささかヤバかった。頂上では別ルートから来た同様な高齢者が一人、この日会ったのは計二

人と山は静かだ。

雪もやんで地藏岳の有名なオベリスクのバックには富士山が逆光で見えて観光写真的、北岳・仙丈から八つから雪の北アも望めた。更に目前にはこれからの縦走路である早川尾根の激しい登り降りが見える。このまま仙水峠からバス道に逃げる手もあるなと一瞬弱気に。

夕暮れ直前に無人の早川尾根小屋着だが、途中で滑落時の打撲かネンザか右ヒザが痛み出し速度上がらず。オレは登りが好きなんだとかなんとか呪文を唱えながら、かなり際どかった。山小屋は昔風で小さなネズミと共に一夜を明かす。夜は西風が強かった。

三日目の朝は快晴だが、ヒザは少し痛む。高嶺から地藏岳にむけてまた岩場の登りでウンザリ、年寄りにはバランスが悪いんだよ。御座石温泉でフロに入ってビールを飲もうとひたすら歩いた。1200円のフロ代は高かったなー。

縦走の荷も乾燥食の為随分軽くなったけど、水場のないルートで水3リットルが余分だが、中国製ザックが前回破壊し、アメリカ製に変えたおかげもあって快適であった。

さて、雪と水は少ないが暑くなく木々が多く、秋は南アが良いと確認した山行でした。

「聖職の碑」を訪ねて

20期 深田 進

1997年7月30日～8月2日 中央アルプス北部縦走 木曾駒ヶ岳、空木岳、越百山

——以下の手記は1997年8月に書いたものです。これまでの数多くの山行
の中で特に印象に残ったこの山行の最初の2日間について紹介します。——

念願の「聖職の碑」コースを辿ることができるようになった。8年前に聖霊病院に入院したとき、病院の図書室で借りたこの本を読んで、いつか登ろうと思っていたが、延び々々になってしまった。登る直前にもう一度読み返し、子供たちの倒れた場所や、避難した岩の位置を頭にたたき込んだ。今回の登山は百名山そのものよりも、将基頭山を中心にした山域と、山麓の内の萱や伊那松島など小説に縁のある場所に気持ちが惹かれていた。

金沢から伊那谷に入る方法は限られている。時間もかかる。今年の10月からは高崎から長野まで新幹線が伸び、横川軽井沢間が廃線となるので、特急白山はこれが乗り納めだろう。7時過ぎに家を出て長野で快速に乗り換えても、伊那市につくのは午後2時である。

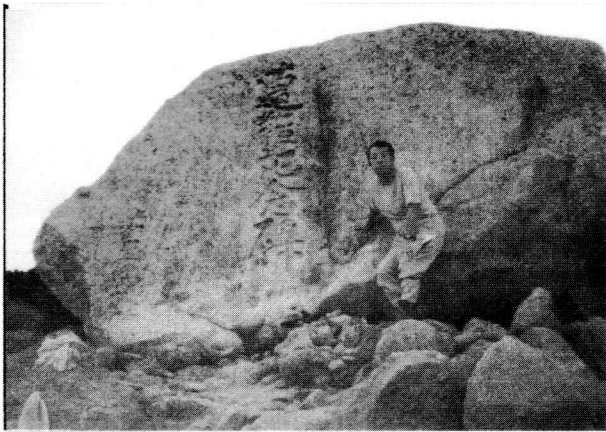
伊那市で食料を調達し、横山までバスに乗る。一緒に乗っていた2、3人が降りて、途中から保育園の園児がどっと乗ってきた。乗客は園児十数人と僕だけだ。所々のバス停で、待っていた母親に連れられて園児が少しずつ降りていく。横山で残った園児に見送られて降りる。ここはイメージしたよりも広々として眺めの良いところだ。大正2年8月下旬、中箕輪尋常高等小学校の生徒たちは、学校のある松島を出発して、天竜川右岸の河岸段丘の奥へと進み、山裾に沿うようにしてこの横山を通っている。自動車道路をてくてくと歩き出す。山裾を回って小黑川の谷を見下ろすところへ来ると、様相は一変する。伊那の河岸段丘から徐々に勾配を増してきた谷は、このあたりで一段と勾配を増し、小黑川溪谷となって突き上げている。突き上げた先はガスの中、晴れていればあのあたりが将基頭山であろう。内の萱の集落は勾配が増したあたりに、引っかかるようにしてあった。道路は舗装され、そば屋も1件あり、小説の面影は感じられない。新しい公民館の「内の萱」の文字だけがあの事故との接点だ。「信州そば発祥の地」の見学などをしていたのでキャンプ場についたのは夕方の5時だった。ぎりぎり受付をする。管理人は夜は帰ってしまうので遅いほうが料金を払わずにすんだかもしれない。ケビンは満員だったがテントは僕だけで、少し離れたオートキャンプのサイトには人がいた。石ころが多く良いサイトが少ない。溪流が幾筋かに分流した中州に張ったので、水音がやかましく耳栓をして寝た。



内の萱集落

翌朝はすっきり晴れた。昨日ガスで隠れていた部分がくっきり見える。胸突き八丁の坂と頭、分水嶺へのスカイライン。将基頭山は谷あいのこの位置からは見えなかった。小説にも出てきた発電所を過ぎ、車道はだんだん急になる。信州大学農学部の中宿所を過ぎるとしばらくで広場になる。バス発着所の名残が残っている。桂小場の登山口だ。ロープウェイができる前はここが駒ヶ岳のメインルートだったそう。登山道はあまり急ではなく歩きやすい。下の方に檜の植林があるが、シラビソの林が続く

気持ちがよい。胸突き八丁の登りもそれほどではなかった。ぶどうの泉、馬返し、大樽小屋、6合目、7合目で休憩。6ピッチで西駒山荘に着く。行者岩のコル（分水嶺）は赤羽校長と平井実が息絶えたところである。稜線上に倒れていた二人を救助隊がここまで降ろして介抱したが間に合わなかったのだ。校長は自分の着ていたものを平井に着させ、下着1枚であつたらしい。コルの木曽側には小平若造の遺体が転がっていた。稜線の風を逃れたところで安心して眠ってしまったらしい。分水嶺からは当時なかった伊那側のトラバース道を行った。稜線通しの道ではさぞ風が強かったろうと思う。有賀兄弟はこの稜線上で倒れたのであった。小屋には小屋番の信州大学の学生が一人手持ち無沙汰にしていた。ここは代々信大の学生が番をしているとのことだ。今日の予定客は5人だそうで、ゆったり過ぎて寒いくらいだ。小屋の本棚にも「聖職の碑」が置いてあって、彼もよく知っていた。



聖職の碑



濃ヶ池

一休みして小説の舞台に出かける。将基頭山は後まわしにして「碑」に向かう。小さなピークを過ぎるとだらだら下り出す。大きな岩が緑の中に転々として、見事な庭園を造っている。宝剣岳の岩峰が印象的だ。それと思しき大きな岩を探して、胸を弾ませながら表側に回り込んでみたがただの岩だった。次に見つけた大きな岩は横に標識のようなものが立っている。これに違いないと思って近づく。「ああ、これだ！」遭難記念碑という文字が大きくはっきりと読みとれる。そのほかの説明文や共えい者の名前は一部読みとりにくくなっているが、小説を読んでいたので内容はよくわかった。大きな立派な自然の岩だが、84年の歳月が流れて、なおここに存在することに心を動かさざるを得なかった。このあたりで北川秀吉、堀峯、有賀直治の3人が死んだのだった。訓導の清水正治と生徒の萩原三平が隠れていた岩を探しに濃ヶ池へと向かう。将基頭からこのあたりは人も少なくハイマツと花と岩に彩られた最高のプロムナードだ。伊勢滝に下る道と木曽駒馬の背コースを前後して見送り、水平なトラバース道は灌木の中を行く。急に前方の地面がなくなって眼下の木の間越しに浅く水面を広げた池が見えた。水が少ないのか土砂が積もったのか、左手の方は砂地の底が現れていて、歩くことができる。池畔の大きく平らな岩に仰向けに寝そべってみる。自分の呼吸とわずかな風の気配、遠くで水の流れる音が微かに聞こえるだけである。馬の背の稜線からの断崖が池の上方に半円形に取り囲むように連なっている。ここもカール地形の名残かもしれない。いつの間にか谷の方から猿の群が登ってきて、思い思いに毛づくろいや採食をしている。最初5、6匹かと思われたが、次々に現れて4、50匹になった。僕の方にちらっと目をやってから池の周りを反対側に移動し、対岸のあたりで遊んでいる。ここは彼らの餌場や、遊び場なのだった。池の谷側は少し小高く

なって灌木が茂っているが、その小高くなった丘の谷に面した方に大きな岩がいくつか重なり合っていて、3つに岩が重なったものが見つかった。ここなら馬の背の稜線に遮られて弱まった風がさらに丘に遮られるので、助かったのもうなずける。池のすぐ近くでは唐沢武男が絶命したのに、ほんの紙一重の差であった。唐沢圭吾が後年白骨で見つかった駒飼ノ池まで行くのはやめて引き返す。帰りに「碑」の前の岩に腰掛けて、読みとれない碑文を漫然と眺めていた。赤羽長重校長と共に倒れた10人の名前がなかなか確認できない。あきらめて帰ろうとしたその時、隠れていた陽がさっと射した瞬間、深めに彫られた碑の文面に陰陽の影が現れ、今まで読めなかった文字がくっきりと浮かび上がった。立ち去ろうとする僕を呼び止めるために、彼らがさせたかのような思いにとらわれ、またしばらく佇んでしまった。小屋の学生に聞いた天水岩を見て将基頭へ到着。伊那谷からはこの山が一番奥に見えるそうだ。足下の西駒山荘が有れば彼らも助かったろう。この事件があったからこそこの小屋ができたのであるが。今でも伊那谷の中学生はこのコースを登ってきて、この小屋に泊まるという。その時は超満員となるが、ロープウェーのできてしまった今、ここを登る人は激減したそうだ。散歩から帰ってまもなく夕立が降り出した。今夜は東京からの3人連れと小屋の取材にきた新聞記者、小屋番の学生と僕の6人だけだった。

——「遭難碑」ではなく「遭難記念碑」と刻まれていることが「聖職の碑」の主題と言えるかもしれません。読んでない方はぜひ御一読をお勧めします。——

